カヒガラムシ科（介殻蟲科）Coccidae

1.

介殻蟲類は一般に小形或は微小の昆蟲で、その形態は種類によって甚異るが、植物に寄生生活を為し、雌は常に翅を全く缺き、その成蟲は寄主植物に定着して運動することが全くなく、或は少しく歩行するのみである。從て雌の觸角、肢及眼等は退化し、甚小くなり、或は肢及眼を全く缺くことが多い。肢の存する場合は雌雄共にその跗節は一節より成り、各肢に一本の爪がある。雄の成虫は一對の翅を有し、或は之を缺き、その體が一般に微小で、野外では甚發見され難く、又雄が全く現はれることなく雌のみで生殖する種類も少くない。從って普通雌の形態によって種類を區別する。

介殻蟲は雌の成虫の形態によって、次の如く2大別することが出來る。

(1) 體は微小で、肢は全くこれを缺き、觸角は退化して甚微小となり、肉眼では認められない。複眼は普通全く無い。腹部の末端の數節は合着して臀板 Pygidium を形成する。明なる一個の介殻を有し、體はその下に在って露出することがない。然し體と

介殻とは癒合することなく、介殻を蟲體より分離することが出来る。卵或は仔は介殻の下に産下される。…………有殻類 Diaspine.

(2) 體は有殻類よりは一般に大きく、普通明なる肢及觸角を有して居るが、之等は肉眼では見難いことが多い。腹部は臀板を形成することなく、白粉、綿状、絲状或は脂状の蠟質物を分泌して體を被ひ、或は之の如き分泌物を缺き體の皮膚が硬化し、或は皮膚と合着癒合して離し難い介殻を形成することもある。成熟する時は體の後下方に線状物を出して卵嚢を形成するものがある。…………無殻類 Non-Diaspine.

介殻蟲の一部にては卵は雌の體内にて孵化し、幼蟲として産下される。此の如き胎生は稀ではなく、又同一種で胎生と卵生とを爲すものが少くない。

第一齢の幼虫は發達せる肢を有し、歩み廻り、適當の場所に寄着し、その後は成虫に至るまで全く移動することなく、或は少しく歩むのみである。

有殻類の雌の幼虫は2回の脱皮を經て成虫となる。従って幼虫には2齢があり、その各齢の脱皮せる皮は介殻の形成に使用さ

れる。有殻類の介殻は普通2枚の幼虫皮と、成虫の分泌物とより成り、幼虫皮は介殻の前端或は中央部の外面に存するを普通とする。稀にコノハカイガラムシ類 *Fiorinia* 等に於けるが如く、介殻は2枚の幼虫皮のみによつて形成され、成虫の分泌物の認められぬこともある。介殻の形態及色彩は種類によつて甚異ることが多いが、介殻の外見のみでは種類の区別の困難なことも少くない。

無殻類にては雌は2回以上の脱皮をするが、その回数は種類によつて差異がある。

介殻虫類の雄は幼虫期の次に蛹の時代を経て成虫となり、蛹期を有しない雌とは異つて居る。有殻類の雄は幼虫時代には、その雌の如く介殻を形成する。その雄の介殻は一般に雌のものよりは小く、色彩及形態も異にすることが少くない。

介殻虫は體が微小であるために肉眼で種類を鑑別することは、專攻者でさへ困難のことが多く、精巧な顕微鏡用標本に製作して、初めてその査定をなし得る。本文に於ては精細なる形態の記載は全く省略し、果樹害虫として注目すべき種の、主として肉

眼的外見のみを記述した。
介殼虫類は植物殊に樹木に寄生し、落葉樹よりは常緑樹に多い。一般に群集して寄生し、植物の凡ての部分を害する。野生植物に寄生する種類はその食草が限定されて居ることが多いが、栽培植物に寄生する種類は一般に甚雜食性で、種々なる植物に生活し、その寄生植物は一定して居ない。此等栽培植物に加害する種類の大部分は世界に廣く分布し、本島特有の種類ではない。
介殼虫類は元來熱帯的の昆虫で、本島には種類が多く、又甚よく蕃殖して居る。又介殼虫類は一般に高温、乾燥に適して居るので、本島の南部にては北部よりは種類も多く、一般に蕃殖も大で、又雨の少い時季及高温季には蕃殖が大である。本島にては一般に周年蕃殖し、一年中發生し、一年に多數の世代を重ねて居る。
介殼虫殊に無殼類は甘味を有する多量の液狀の糞を排出するから、蟻に訪問されることが多く、蟻と共棲して之に保護を受ける種類が少くない。アリカイガラムシ *Saissetia formicarii* Green の如きは常に、シリアゲアリ *Crematogaster* に保護され、その巣の中に生

活し單獨では生活することが出來ない。

介殼虫類は本島には現在約220種が知られ、その中約55種が果樹に寄生する。本島にて柑橘に加害する種のみにても約30種に達する。

介殼虫は種々なる植物に寄生し次の如き害を加へる。

(1) 植物の液を吸收して、之を衰へしめ、枝或は葉を枯死せしめることがあり、蕃殖の大い時はその植物全部を枯死に至らしめる。又葉及新芽を捲縮せしめ、或は蟲癭を形成することもある。

(2) 多量の液状の糞を排泄し、此糞は植物上に附着して煤病を發生せしめ、植物の機能を損じその外觀を害する。

(3) 植物の病原體を傳播することがある。

介殼虫類は此の如く植物には有害の昆虫ではあるが、有益な種類もある。例へばラック介殼虫の如きはその一例で、その分泌物よりは塗料ラックを製し、又白蠟介殼虫の分泌物よりは白蠟を製する。本島にもラック介殼虫の一種が産するが、その分泌物は少く、多量のラックの製造には適しない。

介殼虫の敵虫の主なるものは、瓢虫類及

寄生蜂で、本島にても多くの介殻虫にこれを殺す敵虫が發見されて居る。然しパイナップルに加害する介殻虫の寄生蜂は未だ本島にては有力なるものが發見されない。介殻虫の驅除に敵虫を利用することは世界各地に於て盛に行はれ、本島に於てもワタフキカイガラムシ *Icerya purchasi* Maskell を驅除するために、ベダリヤ瓢虫を輸入して成功したことは、よく知られて居る事實である。又本島へコナカイガラムシ *Pseudococcus* を驅除するために、瓢虫の一種 *Cryptolaemus montrouzieri* を輸入し、此益虫は既に野外に蕃殖して居る。北アメリカ及ハワイは介殻虫の驅除のために、多くの益虫を輸入し、甚有効な結果を示して居るので、本島にても此方面の研究は今後も軽視すべきではない。本島には介殻虫の寄生菌が産し、野外に於て一部の介殻虫(主として有殻類)の蕃殖の制限に多大の效を示して居るが、未だ人工的にその利用は行はれない。寄生菌に寄生されて死せる介殻虫は、介殻上に赤色の菌の存在することによって容易に發見され得る。柑橘に寄生する種類の如きは此菌によって殺されることが多い。

驅除豫防法　介殻虫類は一般に體が微小であるから、小數が果樹に寄生して居ても、その被害は認められない。然し此等の昆虫は一度或樹に寄生する時は、自然のままにては容易にその樹より全く絶滅することなく、その子孫は永年その樹に生活する。従て永年に亘る慢性的の被害は決して少くない。又個々の樹の受ける害は少くとも、果樹園全體としての被害の合計は決して少くないであらう。従て少數の介殻虫にてもこれを輕視することなく驅除すべく努むべきである。

(1)　日本の本土、支那、南洋等には未だ本島に産しない有害な介殻虫が少くない。例へば柑橘、その他の果樹の恐るべき害虫であるサンホーゼカイガラムシ及ヤノネカイガラムシ等未だ本島には生活しない。此等の害虫は苗木に附着して、運搬されるからその侵入を防止することは最必要なことである。本島に於て現在果樹に大害ある介殻虫の大部分は、世界に廣く分布する種類で、曽ては本島に産しなかつたものであらうが、昔苗木と共に輸入され、本島に土着したものと思はれる。之によつて見ても苗

木の輸入に際しては、介殻虫の侵入を防止すべくあらゆる努力が必要である。

(2) 苗木の植付、運搬に際しては青酸瓦斯にて燻蒸して、駆除を計ることが望ましい。之は費用と手數とを要し容易に實行され難いが、パイナツプル苗木の場合等にては必ず實行すべきである。

(3) 被害樹へは松脂合劑(約20倍)、機械油乳劑(約25-30倍)等を撒布すべく、1年に數回撒布するを可とする。石灰硫黄合劑は落葉果樹に對して落葉期に使用するのが最適當である。又撒布用の噴霧器は強力なることを要する。

(4) 藥劑は新芽の出る前に撒布する可とする。何となれば新芽を出す時は介殻虫の第一齢の幼虫は若葉、若枝等に移行して蕃殖し又芽は藥害を受け易いからである。又花の時季とか收穫期には藥劑の使用は不適當であらう。

(5) 同一果樹園に永年同一藥劑を使用する時は、その果樹園の介殻虫は、その藥劑に對して抵抗力を増大することが確認せられて居る。從て同一藥劑を連續して多年使用することなく、2種以上の藥劑を交互に

使用するのが合理的である。

(6) 果樹の介殻虫の大部分は雑食性で種々なる植物に寄生し、その寄主は一定しない。從つて或果樹の介殻虫を驅除する際は、他の樹に寄生せるものをも同時に驅除すべきである。

(7) ワタフキカイガラムシに對しては、ベタリヤテントウムシを利用し、之を驅除するを可とする(ワタフキカヒガラームシの項參照) 又本島に於て、未だ寄生蜂の發見されない一部の介殻虫に對しては、その寄生蜂を外國より輸入蕃殖せしめて、驅除を計ることは望ましい。

(8) 果樹に袋懸を行ふ時は、介殻虫は袋の中に入り込み、その果實上に大蕃殖をすることが少くない。之は介殻虫が袋によつて保護されるからである。從つて袋懸をする場合はその果樹の介殻虫を先づ驅除し、袋は完全にして破れ難いものを使用し、袋を成るべく固く結び附けて介殻虫の侵入を防止せねばならぬ。

(9) 果樹園の周圍の生籬は刺竹が適當である。刺竹には果樹に寄生する介殻虫は全く生活しないが、月橘その他の濶葉樹には

果樹と共通の介殼虫が生活して、害虫の蕃殖育成の場所となり易いからである。

(10) 果樹を愛し、果樹園の巡視を怠らず、害虫の大蕃殖をする以前に早く之を發見して驅除すべきである。

(11) 害虫の驅除豫防は決して容易な事ではなく、不斷の努力とその害虫に對する充分の理解とを必要とする。本文を熟讀するのみならず害虫の習性に注意し之を理解すべく努むべきである。

ワタフキカヒガラムシ

Icerya purchasi Maskell.

雌成虫　楕圓形にして、腹面は扁平であるが脊面は少しく隆起し、暗橙色を呈し黒色の短毛を密生するので暗色に見へる。體は軟で脊面には顯著な白色綿狀物を有しないが、體の下後方に縱條のある大なる綿狀物を出して卵嚢を形成する。體長約6-7mm.

經過習性　此害蟲はオーストラリヤの原産であつて、臺灣には元來産しなかつたが、明治35年頃苗木と共に本島北部に輸入せられ、明治40年頃より臺北附近の種々なる植物に大蕃殖を爲し、大害を爲した著明な害虫である。現在にては全島に分布して居るが、その敵虫ベダリヤテントウムシによつて蕃殖が制限されて居るので割合に少く、大發生をすることは甚しく稀で普通に困難の程少い。夏季稀に多數現はれる。一年に約4世代を經過し、群集して寄生するのを發見することがある。

加害植物　柑橘、リウガン、ナシ、イチジク、ソウシジユ、バラ、カハラヨモギ、クロトン、モクマオウ等。此等の中リウガン、ナシ、イチジク、クロトンには甚少い。

驅除豫防法　本島に於て本種の大發生を爲せる明治42年、本種の敵虫ベタリヤテントウムシを輸入して、之を本島に蕃殖せしめて以來、ベタリヤテントウムシはよく本島に自然蕃殖し、その驅除に多大の效果を示した。現在にては此益虫は土着して、ワタフキカヒガラムシを驅除して居るので、人爲驅除を行ふ必要は殆んど全くない。當殖産局に於ては今も尚此益虫を飼育して、ワタフキカヒガラムシの不時の發生に備へて居るから、何時たりとも此介殼虫の發生をなせる場合當局に申し込んで、この益虫の送附を受け、之をその發生場所に放つを可とする。

分布　全島の平地、澎湖島。日本の本土、支那、フイリッピン、印度、セイロン、アフリカ、ヨーロッパ、オーストラリヤ、北アメリカ南アメリカ等。

エヂプトワタフキカヒガラムシ

Icerya aegyptiaca Douglas.

雌成虫　體は橙黄色で、幅廣き楕圓形を呈し、扁平で體背は全く多量の純白色分泌物で被はれ、又體の全周よりは長い多量の分泌物を出して居る。體長約6.5mm

経過習性　北部には甚しく少く、殆んど發見されないが、南部にては甚普通で、大蕃殖をすることが少くない。種々なる樹木の主として葉裏に群集し、その多量の分泌物のために甚發見され易い。

加害植物　パラミツ、トゲバンレイシ、パンノキ、エノキ、ケガキ、バンジロウ、クロトン、アコウ、アカメカシハ、クワ、アカリフア、カンコノキ、ナスビ、ボチヨウゲ等。

分布　全島の平地(主として南部)。フイリツピン、印度、セイロン、支那、エジプト、オーストラリヤ等。

オカダワタフキカヒガラムシ

Icerya seychellarum Westwood.

異名 *Icerya okadai Kuwana.*

雌成虫 楕圓形にして扁平となり、體脊は少しく隆起し、淡黄色である。體は全く白粉で包まれ、此白粉は少しく淡黄色を帯び、體の周圍よりは甚細長い絲状の分泌物を出す。體長約5mm。

経過習性 本種は少くして大蕃殖をなすことはない、又一所に多數群集することなく、少數が見られるのみで大害はない。雜食性で種々なる樹木の主として葉裏に寄生する。

加害植物 柑橘、ビワ、レンブ、マンゴウ、バンジロウ、ビロウ、アコウ、クワ、タブノキ、アカテツ、イヌマキ、ナンキンハゼ等。

分布 全島の平地、紅島嶼、日本の本土、支那、フイリッピン、印度、ニュージーランド等。

パイナップルノコナカヒガラムシ

Pseudococcus brevipes Cockerell.

異名. オンライコナカヒガラ

Pseudococcus bromeliae Bouché.

雌成虫　體は太く、淡黄色を呈し、灰色乃至淡緑色を帯びることがあり、多量の白色粉状物で全く包まれて居る。肢は割合に太くして、短く、脛節は腿節よりは長くない。體長約2-3mm

経過習性　パイナップルの葉、根元、果實等に群集し、本島の南部に普通で周年蕃殖する。大蕃殖をする時は、寄主を衰へしめ、又果實を不良ならしめる重要な害虫である。本種は外國に於てはパイナップルのみならず、種々なる他の植物にも寄生すると云はれるが、本島に於ては未だ他の植物では發見されない。ハワイに於ては、本種はパイナップルのウイルト病を傳播すると云はれるが、本島にては此事は未だ確められて居ない。パイナップルには本種の他パイナップルシロカヒガラ *Diaspis bromeliae* Kern. 及パイナップルトビイロカヒガラ *Chrysomphalus bromeliae* Newst. 等も寄生する。

加害植物　パイナップル。

敵虫　本島にては瓢虫類及タマバイの一種 *Schizobremia formosana* Felt が、本種を食ひ殺すことが知られて居る。此等の敵虫は他の介殼をも食するもので本種特有の敵虫ではない。

ハワイに於ては此種の有力な寄生蜂が産しないため、目下專問家を南米及東洋に派遣して、その發見輸入に努めて居るが、本島に於ても此方面の研究が必要であると思はれる。

驅除豫防法　本種は體が白粉で全く包まれて居ること、及び根や葉の間に寄生するために驅除が甚困難であつて、目下の處甚有效なる驅除法はない。ハワイにては「ジョンソンチン」Johnsontine と稱する乳劑の驅除藥が石油會社の專賣になつて居て、甚有效であると報告されて居るが、價格は相當に高く、本島に輸入使用することは困難である。目下の處本島にては次の如き方法にて驅除豫防を計るより他に道はない。

(1)　松脂合劑或は機械油乳劑を强力ポンプにて撒布すること。

(2)　苗木を選擇し、その運搬植付に際しては必ず青酸瓦斯にて殺虫すること。本種

No.

は植付用の芽に長期間生存してゐることは多くの人々に認められて居る處であつて、苗木の處置は本種の驅除上最重要である。

(3) 根に寄生せるものは、二硫化炭素或は「サイアノガス」を注入すること。

(4) 蟻は本種を保護するを以て、畑地中に在る蟻の巣を發見して此を驅除すること。

分布 全島の平地。小笠原島、ハワイ、南米、フイリツピン、印度、セイロン、アフリカ等。本種は本島在來の種でなく、海外より苗木と共に輸入されたものであらう。

ミカンノコナカヒガラムシ

Pseudococcus citri Risso.

雌成虫　幼虫は殆んど黄色であるが、成虫は灰色を帯び、楕圓形を呈し、薄く白粉で包まれ、體の全周圍よりは多數の短い絲状の白色分泌物が外方に向て出て居る。成熟する時は體の後下方に白色綿状物を出して卵嚢を形成する。體長2.5-3.5mm。

コナカヒガラムシ類 *Pseudococcus* は本島にては曾てワラジカヒガラムシとして記述されたが、此の名は不適當であるのでコナカヒガラムシと稱することにした。

経過習性　本島に甚普通で大蕃殖をすることがある。周年蕃殖し1年に約10世代を重ねる。枝及葉に群集密着して居る。

加害植物　柑橘、バンジロウ、カキ、パラミツ、パンノキ、ワンピ、クダモノトケイサウ、ソウシジユ、パイナップル、セイロンベンケイサウ、ツルハグマ、センダンクワ、ハギ、クワ、チークノキ、チヤ、オホバギ、ジヤガイモ、キリ、ヘチマ、メヒルギ、ツウソウ等。

分布　全島。日本の本土、支那、フイリッピン、印度、セイロン、ヨーロッパ、ア

フリカ、南アメリカ、北アメリカ、ハワイ等。

農業部農業試験所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

ミカンノタマコナカヒガラムシ

Pseudococcus filamentosus Cockerell.

雌成虫 體は太く、殆んど球形を呈し、黒紫色を帯び、多量の白色の綿状物を分泌して體を全く包んで居る。此綿状分泌物は殆んど球状を呈し少しく淡黄色を帯びることが多い。體長約2-3mm

経過習性 本島に實に普通であつて、種々なる樹木の葉及枝に寄生し、大蕃殖をすることが多く、周年蕃殖して居る。キヨウチクトウの葉は本種の加害によつて、縮んで少しく捲て居るのは、至る處で目に觸れる所である。

加害植物 柑橘、トゲバンレーシ、コーヒーノキ、カリツサ、パラミツ、カヂノキ、レンブ、コンロンクワ、ナツメの一種、クチナシ、ヨウジユ、キヨウチクトウ、チヤ、ワタ、ダイヅ、オホバウゲ等。

驅除豫防法 一般にコナカヒガラムシ類 *Pseudococcus* はその體を包む白色分泌物のために、藥劑に對し抵抗力が強く、藥劑撒布の效が充分でないことが多い。然るに本種の分泌物は容易に松脂合劑や石油乳劑に透浸せられるので、之れ等の藥劑使用は甚驅

除に有效である。

分布．全島の平地．フイリッピン、支那．印度、セイロン、アフリカ、ハワイ、北アメリカ、南アメリカ等。

No.

タイワンコナカヒガラムシ

Pseudococcus lilacinus Cockerell.

雌成虫　體は幅廣き卵形にして、脊面は隆起し、殆んど赤褐色であるが、體の表面の白粉のために紫色を呈して見える。體の周圍より太く短い多數の分泌物を出し、肢は割合に太くして短い。體長約2.5—4mm。

経過習性　本島に甚普通にして、殊に南部に多く大蕃殖を爲すことあり、周年蕃殖す。主として枝に寄生すれども、葉にも寄生し、シリアゲアリに保護されることが多い。又アシナガアリ *Plagiolepis longipes* に訪問される。

加害植物　柑橘には甚しく稀に少數寄生するのみである。パラミツ、パンカノキ、ギウシンリ、バンジロウ、フトモモ、レンブ、ソウシジユ、アレカヤシ、ホウライムラサキ、クロトン、エリスリナ、クチナシ、オホバギ、アカメシハ、ツツヂ、チークノキ等。

分布　全島平地。琉球、フイリッピン、印度、セイロン、アフリカ。

オホヲナガコナカヒガラムシ

Ferrisiana virgata Cockerell.

異名 *Pseudococcus virgatus* Cockerell,

Ferrisia virgata Cockerell.

雌成虫 大形の種類で、體は長く、殆んど楕圓形にして、暗[illegible]色を呈し、少しく淡灰色を帯べる白粉で包まれて居るが、脊面には約2對の白粉を有しない部分があり、此部分は斑紋をなして居る。腹端後方には一對の長くして太き分泌物を出し、體の全周よりは絲状の細長い多數の分泌物を出す。體長約3.5－5mm。

経過習性 本島にては北部に殆んど全く發見されないが、南部には極めて普通で大蕃殖をすることが多い。周年蕃殖し、枝及葉に群集生活をする。甚雑食性で多數の植物に寄生加害する。

加害植物 バンレイシ、トゲバンレイシ、柑橘、パイナツプル、レンブ、バンジロウ、コーヒー、ザクロ、クロトン、アカリフア、モクマオウ、ヨウジユ、ソウシジユ、キヨウチクトウ、チヤ、タイワンレンギヨウ、モモタマナ、バフヒニヤ等。

分布 臺灣(南部)、膨湖島、フイリツピン、

ハワイ. 支那、印度、セイロン、北アメリカ等。

TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

ミドリカヒガラムシ *Coccus viridis* Green

雌成虫　綠色を呈し老齡に達する時は褐色を帶び、體は縮少するに至る。成熟する時は、體の周圍より白色綿狀物を出し、甚サカキノワタカヒガラムシ *Pulvinaria psidii* Maskell に類似して居る。體は太くして扁平、體の周圍に甚短き先端の分枝する多數の剛毛を一列に生して居る。體長約2.5—3.5 mm. 幼虫も綠色であるが、體周には分泌物を出さぬ。

經過習性　本島に於ては北部には全く產しないが、南部平地には甚しく多く、周年大蕃殖をする。甚多數の樹木に寄生し、殊にコーヒーノキの大害虫である。葉裏及枝に寄生加害し、常に煤病を發生させる。

加害植物　コーヒーノキ、サボジラ、アカテツ、バンジロウ、カリッサ、柑橘、クチナシ、センタンカ、ワンピ、サキシマスハウノキ、インドソケイ等。

分布　臺灣(嘉義以南)。フイリッピン、マレー半島、印度、セイロン。

マンゴウカタカヒガラムシ

Coccus mangiferae Green.

雌成虫　淡黄緑色又は淡緑色を呈し、扁平にして、幅廣く體は後方に向つて太まり體の周圍よりは分泌物を出さない。體の周圍には分枝せる多數の毛を一列に有し、體の後方の中央に在る裂目は甚長い。體長約3－4mm。

經過習性　葉裏に寄生し、甚しく少く、從來大蕃殖を爲せること全くなく害少し。

加害植物　マンゴウ、セイロンオリーブ、アカテツ、ボテウジ、ツバキ等。

分布　臺灣(全島平地)。フイリッピン、印度、セイロン等。

No.

ホソナガクロカタカヒガラムシ

Coccus acutissimus Green.

雌成虫　體は全く黒色を呈して堅く、甚細長く、兩端は細まり少しく尖り、體脊は圓く隆起して居る。體の周圍よりは全く分泌物を出さない。體長約5〜6mm。

経過習性　北部には全く産しない。南部にのみ見られる。割合に少いが、大蕃殖をなすことがある。殊にリウガン及ヲガタマ等に多い。常に葉裏に寄生し、體を葉脈に接して寄生して居る。

加害植物　マンゴウ、リウガン、フトモモ、パラミツ、ヲガタマ類等。

分布　臺灣(南部平地)。印度、セイロン。

No.

ナガカタカヒガラムシ

Coccus elongatus Signoret

異名 フトナガカヒガラムシ

Lecanium longulum Douglas.

雌成虫 體は淡黄褐色で細長く、兩端は甚尖らない。扁平で脊面は少しく隆起し、體の周圍には尖端の太まらぬ又分枝せぬ長毛を一列に存する。肢及觸角は割合に發達する。綿狀物を出さず又卵嚢を作らない。體長約4—6mm。

經過習性 周年蕃殖し、本島に普通であるが、大蕃殖をすることは少い。多數の植物の葉及枝に群集寄生して居る。

加害植物 柑橘、ブドウ、ソウシジユ、トゲバンレーシ、バンレイシ、ヤマモモ、ライチ、アレカヤシ、ビンロージユ、テリハボク、オホバツゲ、モクマオウ、クロトン、ギヨトウ、ヨウジユ、ブツソウゲ、クワ、ハギ等。

分布 全島、紅頭嶼。日本の本土、支那、フイリツピン、印度、セイロン、ヨーロツパ、アフリカ、オーストラリヤ、南アメリカ、北アメリカ、ハワイ等。

No.

ヒラタカヒガラムシ

Coccus hesperidium Linne.

雌成虫　體は卵形にして、幅太く、扁平、淡黄褐色或は淡黄緑色等を呈し　白粉を有しない。體の周圍には先端の尖れる毛を一列に有し、肢及觸角は割合に發達する。體長約2.5—3.5mm。

経過習性　本島の平地に普通であるが、大繁殖をすることは甚しく少く、主として葉裏及枝に寄生する。シリアゲアリに保護されることが多い。周年繁殖する。

加害植物　柑橘、ビワ、リウガン、クチナシ、チヤ等。

分布　全島の平地。日本の本土、支那、印度、セイロン、フイリッピン、アフリカ、ヨーロッパ、北アメリカ、南アメリカ等。

No.

アリカヒガラムシ

Saissetia formicarii Green.

雌成虫 體は半球狀であるが、少しく長さは幅よりも大で、皮膚は光澤があつて軟く、黄褐色を呈し、多數の小く圓い淡黄色の斑點がある。體の表面には分泌物を缺き、卵囊を形成することなく、肢及觸角は全く腹面に在つて見難い。體長2-3mm

經過習性 本島の全平地に甚多く、種々なる樹木の枝に寄生し、常にシリアゲアリ Cremotogaster と共棲して、その巢の中に生活することは全くない。周年蕃殖し、大蕃殖は少い。

加害植物 パラミツ、カキ、ケガキ、レンブ、マンゴウ、オリーブ、バンジロウ、モクタチバナ、アカギ、アレカヤシ、ホーライムラサキ、クス、セイロンニツケイ、ユーカリ、アコウ、クチナシ、タイワンツバキ、フカノキ、タブノキ、アカテツ、ヤナギ、ナンキンハゼ、ウラジロエゴノキ、ケヤ、ツバキ、ヌルデ、オガタマ等。

分布 臺灣(全島の平地)、印度、セイロン。

クロカタカヒガラムシ

Saissetia nigra Nietner.

異名 ワタノダエンカヒガラムシ

Lecanium nigrum Nietner.

雌成虫 體は黒色で光澤あり、少しく褐色を帯びることがある。扁平より半球狀に至るまで體形に變異がある。長さは幅よりも大で皮膚は堅く、全く分泌物で被れない。肢及觸角は甚小さく腹面に隠れて居る。體長2.5–3mm

経過習性 本島の平地に甚だ普通であるが、大蕃殖は甚だ少く大害はない。周年蕃殖し、葉及枝等に小群を為して居る。多數の植物に加害し、寄主は一定しない。

加害植物 柑橘、レンブ、バショウ、バンジロウ、ナシ、モクタチバナ、アレカヤシ、カハラヨモギ、アカギ、カンナ、クロトン、ヨウジユ、アコウ、ワタ、カンコノキ、クワ、ヤナギ、ナンキンハゼ、モモタマナ、アスパラガス、テリハボク等。

分布 臺灣(全島平地)。琉球、日本の本土、支那、セイロン、インド、フイリッピン、ハワイ、オーストラリヤ、南アメリカ、北アメリカ等。

1895

オリーブカタカヒガラムシ

Saissetia oleae Bernard.

異名 *Lecanium oleae Bernard.*

雌成虫　黒褐色で光澤なし、半球状に近いが脊面に二横隆起がある。皮膚は堅く、綿状物は全く有しない。體長2-3mm。

經過習性　本島にては甚しく少なく、大蕃殖を見ない。常に枝に寄生し、ライチ及トゲバンレイシ等の梢を枯死せしめることがある。

加害植物　レイシ、リウガン、バンジロウ、トゲバンレイシ、マンゴウ、テリハボク、キョウチクトウ、クチナシ、ワタ、チークノキ、モモタマナ、モクタチバナ、ウスバフウテウボク等。

分布　全島平地、澎湖島、琉球、支那、フイリッピン、印度、セイロン、ヨーロッパ、北アメリカ、アフリカ、オーストラリヤ、ハワイ等。

ハンエンカタカヒガラムシ

Saissetia hemisphaerica Targioni.

異名 ミカンタマカヒガラムシ

Lecanium hemisphaericum Targioni,

Saissetia coffeae Walker.

雌成虫 黄褐色或は栗色を呈し、脊面は隆起して、體は殆んど半形状となり堅く、少しく光澤ありて、綿状物を有しない。肢及觸角は甚だ短くして見難い。體長約3mm。

經過習性 周年蕃殖し、大蕃殖をすることが多い。本島の平地に極めて普通で、多數の植物の葉及枝に群集寄生する。然し果實は殆んど全く加害しない。

加害植物 柑橘、ライケ、カリッサ、カキ、ケガキ、トゲバンレーシ、マンゴウ、バンジロウ、モクタチバナ、カタン、コーヒーノキ、ソテツ、カボチヤ、アコウ、クケナシ、フクギ、サルスベリ、タブノキ、リウキウコクタン、アカテツ、チヤ、ヌルデ、ボチヨウゲ、センタンクワ、リウゼツラン等。

分布 全島、紅頭嶼、琉球、日本の本土、支那、フイリッピン、印度、セイロン、ヨーロッパ、アフリカ、南アメリカ、北アメ

1895 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE

No.

リカ、ハワイ、オーストラリヤ等。

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

No.

キッコウカタカヒガラムシ

Eucalymnatus tessellatus Signoret.

雌成虫　體は太い楕圓形を呈し、前方に向つて少しく細まり、甚扁平で體脊には龜甲狀の明なる網目が存する。暗赤褐色或は黑赤褐色を呈し、綿狀の分泌物を全く有しない。體長約4―6mm。

經過習性　本島の南部には普通であるが、大群をなすことは甚稀で、大害はない。常に葉裏に生活する。雜食性であるが常に樹木に加害する。

加害植物　リウガン、マンゴウ、バンジロウ、アカテツ、タブノキ、ヤシ、セイロンニツケイ、グミトベラ、テリハボク、インドゴムノキ、サキシマスハウノキ、イヌマキ等。

分布　全島の平地。印度、セイロン、フイリツピン、オーストラリヤ、ヨーロッパ、北アメリカ等世界に廣く分布す。日本の本土にては溫室内に發見せられると云ふ。

オホヒラタカヒガラムシ

Paralecanium expansum Green.

雌成虫　體は甚だ扁平にて薄く、殆んど圓形を呈し、體の周圍には扁平なる扇狀の多數の毛を一列に存する。大形にして、淡黄褐色を呈し白色の分泌物は出さぬ。體長約 6-7mm

經過習性　常に葉裏に密着し、發見され難い。普通甚少く、稀に多數群集することがあるのみで大害はない。

加害植物　ヤマモモ、ガジュマル、タブノキ、カゴノキ、等。

分布　全島(平地)。印度、セイロン、フイリッピン等。

マンゴウワタカヒガラムシ

Pulvinaria taiwana Takahashi.

雌成虫　黄褐色にして中央部は黒味を帯び扁平にて殆んど圓形を呈する。大形にして成熟する時は甚だ多量な純白色の綿状物を出して體の後方下に大なる卵囊を形成する。卵囊は體より大きく、體を前上方に持ち上げて居る。體長約7-8mm

經過習性　從來嘉義に於て發見されたのみで、12月一1月頃成熟した雌が見られる。葉裏及枝に寄生し又幹にも粗なる群をなして生活する。一般に少く大害を見ない。

加害植物　マンゴウ。

分布　臺灣(南部)。

サカキノワタカヒガラムシ

Pulvinaria psidii Maskell.

雌成虫　卵形、扁平にして、綠色であるが老熟と共に褐色となり、又體は縮小するに至る。體の周圍には先端の太まり叉分叉する多數の剛毛を一列に有する。肢及觸角は發達して居る。少しく白粉にて被はれ成熟する時は體の下後方に多數の白色綿狀物を出し卵嚢を形成する。體長約3.5mm。

經過習性　周年蕃殖し、大蕃殖をすることが多い。本島の平地に極めて普通で、多數の樹木の葉及枝に寄生する。甚しい密集はしない。

加害植物　バンジロウ、マンゴウ、柑橘(柑橘には極て少く、殆んど寄生しないと云つてもよい程である)パラミツ、ライチ、リウガン、コーヒーノキ、クチナシ、ホチヨウゲ等。

分布　全島の平地。日本の本土、支那、フイリツピン、印度、セイロン、ハワイ、北アメリカ等。

No.

タイワンタカカヒガラムシ

Pulvinaria polygonata Cockerell.

異名　カメノコカヒガラムシ(新稲戸)。

雌成虫　體は長卵形にして、黒褐色を呈し、成熟する時は白色綿状物を體の後下方に出して大なる卵嚢を形成し、體は縮少する。體長約3.5mm。本種はサカキノワタカヒガラ *Pulvinaria psidii* Mask. とは體の周圍の長毛が先端太まることなく、少しく分枝することによつて區別し得る。

經過習性　全島の平地に分布して居るが、南部には殊に多く、大蕃殖をすることがある。主として枝に群集するが、葉にも寄生し、シリアゲアリと共棲することが少くない。殊にゲツキツに寄生する幼虫はシリアゲアリの巣の中に居ることが多い。一年に約3世代を重ねると云ふ。

加害植物　柑橘、ゲツキツ。

分布　臺灣(平地)。琉球、フイリツピン、印度、セイロン等。

ナシセダカカヒガラムシ

Inglisia formosana Takahashi.

雌成虫　殆んど黄褐色を呈し、脊面は甚隆起し、二枚の貝を左右より合せた如き形を呈する。體長約6mm。

經過習性　從來、唯一度、臺北州士林に於て、梨の枝に發見されたのみで甚少く、重要な害虫ではない。

加害植物　ナシ

分布　臺灣(士林)

ホシガタカヒガラムシ

Vinsonia stellifera Westwood.

雌成虫　暗紫色を帯び、星形に周圍に7本の太き白色の分泌物を出す。體長約1.6mm。

經過習性　本島にては唯恒春地方に産し、一般に少く大害はない。マンゴウ及フクギの葉に粗なる群をなして生活する。

加害植物　マンゴウ、フクギ。

分布　臺灣(恒春)。印度、セイロン、フイリツピン。

ルビーロムシ *Ceroplastes rubens* Maskell

異名 モモイロロフカヒガラムシ

雌成虫 暗紅褐色の堅い蠟質物で全く包まれ、全形は稍々扁平である。體長3.5－4.5mm。

經過習性 日本の本土に於ては柑橘の大害虫として知られて居るが、本島に於ては甚だしく少く、害虫として重要ではない。枝に寄生することあれども、主として葉の主脈に沿ひて着生し、大群をしない。北部よりも南部に普通である。雜食で次に記するが如く雜多の樹木に寄生する。

加害植物 柑橘、フトモモ、リウガン、マンゴウ、アカテツ、テリハボク、セイロンニツケイ、フクギ、チヤ、メヒルギ等。

分布 臺灣(全島の平地)。日本の本土、支那、フイリツピン、印度、セイロン等。

1895

ツノロウムシ　*Ceroplastes ceriferus* And.

雌成虫　體は多量の白色粘質の蠟質物で全く包まれ、脊面は隆起し全形は半球狀に近く、後端は後方に突出する。體長約7mm。

經過習性　本島にては一般に甚だ少く、大蕃殖をすることなく、大害はない。種々なる植物の枝に小數宛寄生して居る。

加害植物　柑橘、マンゴウ、カハラヨモギ、ヨウジユ、センタンクワ、ノボタンタデ、クワ、テンニンクワ、タイトウリウガン、コウトウニクツキ、チヤ、タブノキ等。

分布　全島の平地、紅頭嶼。日本の本土、支那、印度、フイリツピン、セイロン、北アメリカ等。

No.

フロリダロウムシ

Ceroplastes floridensis Comstock.

雌成虫　白色粘質固形の蠟質物で全く包まれ、脊面は圓く隆起し、全形は半球狀に近い。蠟質物は多少淡紅を帶びることがある。體長2.75−3.8mm。

經過習性　本島にては甚少く、大蕃殖を呈することなく、大害をしない。雜食性で種々なる植物の枝に粗なる小群となりて寄生して居る。

加害植物　パラミツ、柑橘、ケガキ、ビワ、マンゴウ、バンジロウ、カキ、カリッサ、テリハボク、クチナシ、タブノキ、センリヨウ、テンニンクワ、ワヒメツバキ、チヤ、ツバキ、カラタチ、ボチヨウヂ、モクタチバナ等。

分布　全島の平地。日本の本土、支那、印度、セイロン、北アメリカ等。

No.

コブカヒガラムシ

Tachardina theae Green et Mann.

雌成虫　少しく扁平となれる球状にて、黒褐色或は暗赤褐色を呈し、甚だ堅い。周圍には縦の凹入が存し、皮を除いた蜜柑の果實の如き形を呈する。體長約5mm。

經過習性　本島の平地に甚だ普通で、種々なる樹木の主として枝に群集密着し、大蕃殖をすることが多い。葉及果實には決して寄生しない。一年に二世代を重ねるが如く、4-5月頃第一回の幼虫が見られる。

加害植物　カキ、ヤマモモ、チヤ、ヒメツバキ、フウノキ、テンニンクワ、ヨウジユ、モクタチバナ、タブノキ、オガタマ等。

分布　臺湾(全島平地)。印度。

グリーンコブカヒガラムシ

Laccifer greeni Chamberlin.

異名　ラックカヒガラムシ(在來種)

雌成虫　暗紅色或は暗紅褐色の多量の松脂の如き分泌物を以て全く包まれて居る。密に群集して寄生し、各個體の分泌物は互に合着して、一群が一塊となつて居ることが多い。此分泌物は少しく光澤あり固形となり、塗料となるラックを含有し、之よりラックを製し得る。然しその量は眞のラックカヒガラムシ(印度產、本島に產せず)よりは甚少い。

經過習性　本島の北部には全く產せず、嘉義以南の平地には普通であるが、大蕃殖をすることはない。種々なる樹木の枝に寄生するが、葉には全く寄生することなく、殆んど常にシリアゲアリと共棲して之に保護される。

加害植物　リウガン、マンゴウ、アコウ、フウノキ、タブノキ、アカテツ、モモタマナ、ヨウジユ、テンニンクワ等。

敵蟲　夜蛾の一種の幼虫は本種を食する。此蛾は甚普通で蟻と共棲せるものには殊に多い。

No.

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

分布 臺灣(南部)、フイリッピン。

マンゴウノシロカヒガラムシ

Aulacaspis mangiferae Newstead.

雌成虫　介殼は殆んど圓くして、扁平、薄くして白色であるが、透明でない。幼虫皮は介殼の周邊に近く存し、黒褐色である。介殼の徑は約1.6mm 雄の介殼は白色で小さく密に群集して居る。

經過習性　マンゴウの葉に群集寄生し、主として南部に產し、稀ではない。

加害植物　マンゴウ。

分布　臺湾(平地)。印度、ジヤバ。

クワノカヒガラムシ

Diaspis pentagona Targioni.

異名 *Sasakiaspis pentagona Kuwana.*

雌成虫　介殻は圓くして、背面少しく隆起し、白色にして淡褐色或は灰色を帶びる。徑約2.0－2.5mm. 雄の介殻は細長く、白色で、長さ約0.75－1.0mm.

經過習性　全島に產し、甚だ普通で、大蕃殖をすることがある。モモ及スモモ等にては主として枝に群集寄生して居る。本種はクワの害虫として名高いが、雜食性で他の多數の植物にも加害する。

加害植物　モモ、スモモ、クワ等。

分布　全島。世界に廣く分布する。

オンライシロカヒガラムシ

Diaspis bromeliae Kern.

異名　オンライマルカヒガラムシ

雌成虫　介殻は薄くして白色を呈し、扁平で背面少しく隆起し、殆んど圓形である。幼虫皮は淡黄褐色を呈し、介殻の殆んど中央部或は周縁の近くに存する。徑約2.2mm.

經過習性　本島の南部の一部分（嘉義附近及屏東附近）に蕃殖をして居る。本種は海外に於てはパイナップル以外の種々なる植物にも寄生すると云はれて居るが、本島にては未だパイナップル以外の植物では發見されない。葉に群集して寄生し、主として基部に多い。

本島のゲッキツには、本種に外見が甚類似するゲッキツシロカヒガラムシ *Aülacaspis mürrayae Takah.* が多い。此等の2種は當業者に屢々同一種と看做れるが、全く別のもので、オンライシロカイガラムシは決してゲッキツに寄生しない。

驅除豫防法　苗木の運搬植付に際しては青酸瓦斯にて燻蒸すること。機械油乳劑或は松脂合劑を撒布すること。

加害植物　パイナップル。

分布　臺湾(南部平地)。ハワイ、北アメリカ、南アメリカ等。

TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

No.

ハランノナガカヒガラムシ

Pinnaspis aspidistrae Signoret.

異名 キイロカヒガラムシ

雌成虫 介殻は牡蠣殻状を呈して、後方に向つて太まり、暗黄褐色或は栗色を呈し、扁平で彎曲し、周圍に凹入があることが多い。長さ約2-3mm。雄の介殻は小さくして、白色を呈し、群集する。

經過習性 本島は平地に甚だ多く、大蕃殖を呈することが多い。幹枝及葉或は果實に群集して寄生して居る。本種は雄の介殻が白色で且密群をなすため甚だ發見し易い。雜食性で柑橘其の他雜多な植物に寄生する。周年蕃殖し一年に約7-8世代を重ねる。

加害植物 柑橘、イヌツゲ、ラン類、サルトリイバラ、アカテツ、ガランビイヌビワ等。

分布 全島。世界に廣く分布する。

ミカンノカキカヒガラムシ

Lepidosaches becki Newman.

異名　ミカンカヒガラムシ

Lepidosaphes citricola Packard

雌成虫　介殻は後方に向つて幅廣まり、牡蠣殻狀を呈し、赤褐色にして周邊部は色淡く、扁平、少しく曲ることが多い。長さ約3.0―3.5mm。雄の介殻は雌と殆同色にして長さ約1.5mm。

経過習性　本島の柑橘に甚だ普通にして、大蕃殖を呈することが少くない。殆んど全島の柑橘園に見られる程極めて普通の種である。枝及葉に群集寄生するが又果實にも寄生する。周年蕃殖する。

加害植物　柑橘、ゲツキツ。

分布　全島、世界に廣く分布す。

1895

ミカンノナガカキカヒガラムシ

Lepidosaphes gloveri Packard.

異名　*Mytilaspis gloveri Packard.*

雌成虫　介殻は甚だ細長くして、両側並行し、前端部少しく細まり、淡褐色乃至黒褐色を呈する。長さ約2.5–3 mm。雄の介殻は黄褐色にて、長さ約1.5 mm。

経過習性　甚だ普通にして、殆んど全島の柑橘園に見られ、大蕃殖を呈することがある。周年蕃殖し、枝葉及果實に寄生する。

加害植物　柑橘。

分布　全島。世界に廣く分布す。

ゾウビコノハカヒガラムシ

Fiorinia Proboscidaria Green.

雌成虫 介殼は細長く、殆んど幼虫皮のみより成り、分泌物を有しない。第2幼虫皮は長く、背面中央に一本の縱隆起線がある。淡黄色—淡黄褐色を呈し、光澤がある。體の先端部は細長く突出し、象の鼻狀を呈するので此名がある。介殼の長さ1.6mm。

經過習性 葉及果實に寄生する。從來本島に於ては員林及嘉義に於て發見されたのみで廣く分布して居ない。袋懸けした柑橘果實に大蕃殖を呈したことがある。

加害植物 柑橘、フトモモ。

分布 臺灣(南部)。琉球、印度。

ミカンノコノハカヒガラムシ

Fiorinia theae Green.

雌成虫　介殻は細長く、殆んど幼虫皮のみより成り、分泌物を有しない。第2幼虫皮は甚だ大きく、背面中央に一本の縦隆起がある。黄褐色にて、中央部暗色を呈し、光澤を有し、扁平である。本種はゾウビコノハカヒガラムシに甚だ似て居るが、體の前端部に存する突起は短いので區別し得る。殻の長さ約1.5mm。

経過習性　南部に普通にして、柑橘の枝及葉に寄生し、大蕃殖をすることが少くない。北部には少い。

加害植物　柑橘、サカキ。

分布　臺灣、印度、日本の本土等。

No.

リウガンコノハカヒガラムシ

Fiorinia nephelii Maskell.

雌成虫　介殻は淡黄褐色にして、光澤なく、幼虫皮のみより成り、甚だ扁平にして、幅廣く、中央部最も大きく、後方に向つて細まつて居る。長さ約0.85mm。雄の介殻は小さく、白色綿狀物を有し甚だ目立ち易い。

經過習性　本島のリウガンに甚だ普通であるが、大蕃殖は少く、大害はない。葉裏に點々寄生す。

加害植物　リウガン。ライチ。

分布　臺灣(全島)。支那、ハワイ、クインスランド。

ヒメクロカヒガラムシ

Parlatoria zizyphi Lucas.

異名　クロホシカヒガラムシ
　　　クロイロクロホシカヒガラムシ

雌成虫　介殻は小さく、全く黒色を呈し、後端に淡褐色の小部分があり、幅廣く、甚だ扁平である。長さ約1.2–2mm。

經過習性　本島の柑橘に最も多い種の一つで、殆んど全島の柑橘園に見られ、大蕃殖をすることが甚だ多い。葉、枝及果實に點々と粗なる群をなして寄生し普通密群はしない。周年蕃殖し、1年に7–8世代を重ねる。

加害植物　柑橘。

分布　全島。世界に廣く分布す。

ヒメマルカヒガラムシ

Parlatoria pergandei Comstock.

異名　マルクロホシカヒガラムシ

雌成虫　介殻は略々圓形であるが、幅廣き楕圓形のものもあり、甚だ扁平で、薄く、灰色乃至淡褐色を呈する。幼虫皮は介殻の周邊に存し、淡黄褐色を呈し、幅廣く第2幼虫皮は殆んど圓い。介殻の長さ約1.4mm。

經過習性　本島に甚だ普通で、大蕃殖をなすことがあり、殆んど全島の柑橘園に發見される。枝葉及果實に寄生し、袋懸せる柑橘果實は大蕃殖をすることがある。周年蕃殖し、柑橘のみならず他の種々なる植物にも寄生する。

加害植物　柑橘、ツバキ、蘭、サカキ、タイワントゲイヌツゲ、リントウ等。

分布　全島。世界に廣く分布す。

No.

ヒメナガカヒガラムシ

Parlatoria proteus Curtis.

異名 ナガクロホシカヒガラムシ

雌成虫 介殻は卵形を呈し、褐黄色で、周邊は白色を帯び、薄くして半透明である。幼虫皮は暗色、第2幼虫皮は卵形、介殻の前端に在る。介殻の長さ約1.5mm。

経過習性 葉枝及果實に寄生し、前種よりは甚だ少い。

加害植物 柑橘、蘭、等。

分布 全島。世界に廣く分布する。

コバンマルカヒガラムシ

Pseudaonidia trilobitiformis Green.

雌成虫　甚だ扁平にて、黒褐色を呈し、少しく灰色を帯びて、光澤なく、小判形或は不規則の圓形を呈し、長さ約3.5mm。

經過習性　本島に甚だ普通にして、多種の樹木の枝及葉に寄生するが、柑橘には割合に少い。葉にては上面の主脈に沿ふて寄生し、小群集をして居る。ヨウジユに大蕃殖をすることがある。

加害植物　柑橘、パラミツ、テリハボク、ヨウジユ、インドゴムノキ、タイワントゲイヌツゲ、タブノキ、ゲツキツ、チヤ、アカギ、イタビカヅラ、アイギヨタシ等。

分布　臺灣全島。琉球、日本の本土、支那、印度、セイロン、フイリツピン、南米等。

ウスイロマルカヒガラムシ

Aspidiotus destructor Signoret.

雌成虫　介殼は圓く、透明で、甚だ薄いので、内部の虫體が透視される。虫體は鮮明な黄色を呈し介殼よりは遥に小い。古い介殼は少しく淡褐色を帶びて居る。幼虫皮は介殼の中央部に存し淡黄色である。介殼の徑約1.3mm.

經過習性　本島の平地に甚だ普通で、大蕃殖をすることがある。葉裏に群集寄生し、周年蕃殖する。柑橘の葉は本種の加害により黄色を帶びるに至る。雜食性にして種々なる植物に寄生する。

加害植物　柑橘、パパイヤ、マンゴウ、オガタマ、ボケヨウゲ、リントウ、クス、ヨウジユ、ネズミモチ、

分布　全島の平地。世界の熱帶及亜熱帶に甚だ廣く分布する。

ヤシノシロマルカヒガラムシ

Aspidiotus lataniae Signoret.

成蟲　雌介殻は白色不透明にて圓く、幼虫皮は介殻の中央部に存して、褐色である。徑約1.3-1.5mm。

經過習性　枝幹及葉裏に群集寄生し、大蕃殖することがある。本島には甚だ普通で、周年蕃殖し、雜食性で、種々なる樹木に寄生する。

加害植物　マンゴウ、バンジロウ、ゲガキ、ビンロウジユ、ビロウ、クワ、ソテツ、ブツソウゲ、蘭の一種、ヤシ等。

分布　全島の平地。澎湖島。世界の熱帯地方に甚だ廣く分布す。

ミカンノマルカヒガラムシ

Chrysomphalus aonidum Linne.

異名 トビイロマルカヒガラムシ

〃 *Aspidiotus ficus* Ashmead.

アカホシクロマルカヒガラムシ

Chrysomphalus ficus Ash.

雌成虫 介殻は黒褐色或はチヨコレート色にして、厚く、光澤甚だ少く、圓形にして、背面に少しく隆起す。幼虫皮は介殻の中央部に存し、赤褐色である。介殻の徑は約2mm。虫體は鮮明なる黄色である。

經過習性 本種は本島柑橘の最も普通の害虫であつて、全島の柑橘園に發見せられ、大發生をすることが多い。主として葉裏に寄生するが、果實にも發見される。周年蕃殖し一箇年に5—6世代を重ねる。甚だ雜食性で柑橘の他に雜多の植物に寄生する。

加害植物 柑橘、マンゴウ、カリツサ、ミバセウ、チヤ、ビンロウジユ、ツゲ、カヤプテ、テリハボク、クスノキ、ヤシ、ソテツ、オホバアワセンダン、ガジユマル、フクギ、ネヅミモチ、ブタノキ、クズウコン、コウトウニクヅキ、モクセイ、オホバアカテツ、リントウ、バラ、ツバキ、クロ

TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

マツ・イヌマキ等。

分布 全島。世界に廣く分布す。

TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

No.

ミカンノマルカヒガラモドキ

Chrysomphalus dictyospermi Morgan.

雌成虫　介殼はミカンノマルカヒガラムシに似て居るが、色淡く、灰色を帶べる褐色を呈し、一層扁平である。幼虫皮は黄褐色で介殼の中央部に存する。介殼の徑約1.3mm。

經過習性　葉及枝に群集密生し、大蕃殖をすることが多い。周年蕃殖し、普通である。

加害植物　柑橘、マンゴウ。

分布　臺灣(全島の平地)。支那、印度、北アメリカ、南アメリカ等。

クロホシマルカヒガラムシ

Chrysomphalus rossi Maskell.

雌成虫　介殻は圓形にて、扁平で赤褐色乃至暗褐色を呈し、幼虫皮は介殻の中央部に在りて、黒色である。介殻の徑約2-3 mm。

經過習性　本島にては一般に少いが稀に大蕃殖をする。葉裏及葉表に寄生し、雜食性で種々なる植物に發見される。

加害植物　マンゴウ、ヨウジユ、テリハボク、セイロンベンケイソウ、メヒルギ、ヤシ等。

分布　全島の平地。世界に廣く分布する。

パイナツプルトビイロカヒガラムシ

Chrysomphalus bromeliae Newstead.

雌成虫　介殼は圓く、扁平にして、背面少しく隆起し、暗褐色を呈し、幼虫皮は介殼の中央部に存して暗褐色である。介殼の徑は約1.7mm.

經過習性　パイナツプルの葉の主として根元に寄生する。近頃初めて本島に發見せられ、その經過習性の詳細は全く知られない。

加害植物　パイナツプル

分布　臺湾（南部）。カナリー島、セーシュレス島、英國（温室）。

アカマルカヒガラムシ

Chrysomphalus aurantii Maskell.

異名 *Aspidiotus aurantii Maskell.*

雌成虫　介殻は圓形にして、甚だ扁平であつて、薄く半透明で、淡黄赤色に見へる。成熟せるものにては腹部は前方に凹入する。幼虫皮の介殻の中央部に存し、赤黄色である。介殻の徑は約2mm。

經過習性　本島の柑橘に甚だ普通で、全島の柑橘園に見られ、大蕃殖をすることがあるが、ミカンノマルカヒガラムシよりは少い。周年蕃殖し葉、枝及果實に寄生する。雜食性で雜多な樹木に生活して居る。一年5世代を重ね周年蕃殖して居る。

加害植物　柑橘、マンゴウ、モクタチバナ、フカノキ、イヌマキ、オホバツゲ、アスパラガス等。

分布　全島。世界に廣く分布す。

イネノコナカヒガラムシ

Trionymus taiwanus Takahashi

雌成虫　暗紫褐色を呈し、稍灰色を帯びた白粉で包まれて居る無殻類の1種である。体は嚢状で、長味を帯び、触角は7—8節より成り、口線(Rostal loop)は甚長く、中肢の基部又はその後方にまで達する。体長約4—4.3mm。

經過習性　禾本科の草本の莖及葉に寄生し、野生の禾本科植物より稲に移って、之に加害することがあり、温室内で水稲に大蕃殖をするのが観察された。陸稲では未だ發見されないが、今後蕃殖することが起り得ると思はれる。

加害植物　稲　禾本科雑草。

驅除豫防法　介殻虫の驅除法に就ては、既に前編に於て説明したから、之を參照されたい。

本種は野生禾本科植物より稲に移るものであるから、野生雑草の驅除を充分にすることは豫防上必要である。又被害株及その切株をも充分除去して、燒却せねばならぬ。

分布　現在台湾以外よりは未だ知られない。日本本土及印度にては種々な介殻虫が

No.

稲に加害することが知られて居るが、本島では今説明した1種が稲に寄生することが報告されたのみである。

本島の野生禾本科植物には種々な介殻虫が寄生して居る。今後此等の種類が稲及びその他の禾穀類に加害するに至ることが起り得るであらう。

95 ワタノコナカヒガラムシ

Phenacoccus hirsutus Green

雌成蟲　形態はコナカヒガラムシ*Pseudococ*
に甚似て居る。體は軟くして、赤黄色を呈
し、多數の毛を生じて居る。密に多量の白
色綿狀物を分泌して體を包み、枝、葉等に
密集し、綿狀物は互に合着して、1塊をし
て居ることが多い。

經過習性　草棉に寄生し、稀に大蕃殖を
する。　又甚稀に桑にても見られることが
ある。エジプト等に於ては、棉の主要害蟲
として知られて居る。本島にてはまだ大害
は見ないが、今後、注意すべき害蟲であら
う。主にブッソウゲに寄生し、此より棉に
移り来るものである。ブッソウゲには本種
の他に尚、ワタノアブラムシ、アカホシカ
メムシ、ワタノコナジラミ、ワタノメイガ
等が寄生し、棉害蟲の育生場所となり易い。
從て、棉栽培に於ては、ブッソウゲには注
意を拂はねばならない。

加害植物　草棉、ブッサウゲ、桑。

驅除豫防法　本種は、白色綿狀物を分泌
し、又密集して塊をなし目立ち易く、容易
に発見される。從て少數の場合は、容易に

No.

捕殺し得る。ブッソウゲに注意して、その育生場所となることを防ぐを要する。

分布 台湾、印度、フィリッピン、エジプト等。

總、農、試、昆蟲係用紙　(19×24)

No.

96 オホワタカヒガラムシ

Pulvinaria maxima Green

異名：*Pulvinaria thespesiae* GREEN

雌成蟲　赤味を帯びた黒褐色を呈する。成熟する時は、白色の細長い卵塊を體の後方に形成するに至る。此卵塊は體よりも長く甚だ見易い。體長6〜9.5mm。

經過習性　幹及枝に寄生し大蕃殖をすることが少くない。殊に恒春地方に多く、雜食性であつて、次に示すが如く種々なる植物に寄生する。

加害植物　チヨマ、桑、カンコノキ、カラムシ類。

分布　台灣、印度、セイロン、フイリッピン、エジプト等。

甘蔗の害蟲としては次の様な種類が認められてゐる。

97 カンショノカタカヒガラモドキ

Aclerda takahashii Kuwana.

成蟲體の大きさは5〜7×2〜4mmで略楕圓形を呈し、扁平である。色は淡黄紫色但し斃死したものは暗褐色となる。外皮はキチン質に富み體側に針状の刺毛を有し體周には多少白色綿絮状の蠟質物を分泌して居る。

經過習性　本種は蔗茎と葉鞘との間隙に蟄居し主に蔗茎の節の上部に寄生して汁液を吸收するものであるが未だ大害のあつたことを聞かない。幼蟲は胎生である。

加害植物　甘蔗

分布　台湾。

天敵　本種には数種の寄生蜂が居るが種名は未だ決定せられて居ない。

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

98 カンショノコナカヒガラムシ

Trionymus sacchari Cockerell

異名：カンショコナムシ

甘蔗粉蟲

成蟲　體長5mm内外。楕圓形で腹面は平たく背面は膨んで居る。色は暗桃色で表面に白色粉状の蠟質物を被って居る。觸角は8節、口吻は2節から成り、肢は極めて貧弱であるが歩行は出来る。

卵　長楕圓形で長さ0.5mm淡黄色。

幼蟲　孵化當時の幼蟲は淡桃色で長楕圓形を呈し、尾端に2對の剛毛を生じて居る。觸角及肢は比較的大きく歩行は達者である。體長0.5mm。

經過習性　本種は主として蔗莖の節の下部蠟帯上に寄生し汁液を吸收するもので收穫期の蔗莖は殆んど100%寄生されて居る。又此の害蟲は蔗莖の汁液を吸收するばかりでなく肛門から甘露を排泄し、これが蔗莖の表面に附着して煤病を起すから蔗莖を著しく汚損する。本種の成蟲の大部分は雌で單性生殖によって産卵し、卵の期間は普通3日位である。幼蟲期間は約20日間、成蟲の壽命も約20日間で1雌の産卵數は約200

である。又極めて稀に雄の成蟲（有翅）も現はれるが之は殆ど生殖に關與しないで壽命は僅かに3日位である。成蟲は運動不活潑で移動は困難であるが、幼蟲は運動活潑で歩行が自由であるから蔗莖を上へ上へと昇つて行き、狹い葉鞘の間隙にも入り込んで芽の周圍に吸着して居るから採苗の場合、氣附かずに蔗苗と共に傳播されることが甚だ多い。其の他蟻によつて運搬され、蕃殖する場合も甚だ多いから注意すべき害蟲である。

分布　世界共通の種類で至るところに分布して居る。

天敵

1. コナムシヤドリバチ
Anagyrus saccharicon TIMB.
2. 瓢蟲の1種　*Coccinellid* sp.
3. 寄生菌の1種　*Aspergillus* sp.

輸入瓢蟲クリプトテンタウ *Cryptolaemus montrouzieri* MULS. は鳳梨の粉介殼蟲を好んで食ふが、甘蔗の粉介殼蟲を食はない。

99 カンシヨノヒメコナカヒガラムシ

Trionymus diminutus Leonard

異名：ハイイロコナムシ

本種はカヒコナカヒガラムシに似て居るが體はもつと灰色である。寄生場所は前種同様で台湾では臺中及苗栗附近に分布して居る。此の外甘蔗に寄生する介殻蟲の種類は次の如きものである。(100) カンシヨノフクロカヒガラムシ *Antonina indica* GREEN (地下茎部に寄生す)、(101) カンシヨノシロカヒガラムシ *Aulacaspis tegalensis* ZEHNTNER (茎に寄生す)、(102) タカノカヒガラムシ *Coccus takanoi* TAKAHASHI (葉、葉鞘に寄生す)、(103) アリノタカラカヒガラムシ *Eumyrmococcus smithi* SILVERSTRI (根に寄生す)、(104) カンシヨノネクヒカヒガラムシ *Leucanopsis sacchari* TAKAHASHI (根に寄生す)、(105) ミゾカヒガラムシ *Mizococcus sacchari* TAKAHASHI (根に寄生す)、(106) ヲガサハラコナカヒガラムシ *Pseudococcus boninsis* KUWANA (茎葉に寄生す)、(107) カンシヨノチビコナカヒガラムシ *Pseudococcus saccharicola* TAKAHASHI (葉の基部に寄生す)。

臺灣總督府農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

農業部農業試驗所
TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE
1895